

子宮内細菌叢が着床環境に与える影響についての検討

門上大祐¹、木村文則⁴、矢嶋秀彬¹、北山利江¹、太田志代¹、山内博子¹、勝佳奈子¹、村上節³、中岡義晴¹、森本義晴²

(1. IVF なんばクリニック、2. HORAC グランフロント大阪クリニック、3. 滋賀医科大学産科婦人科学講座、4. 奈良県立医科大学産婦人科講座)

【目的】

近年、NGS による 16SrRNA 遺伝子の可変領域を利用した菌の定量化が可能となり、細菌叢をより包括的に評価することが可能となっている。子宮内細菌叢において、Lactobacillus の不足が RIF の一因である可能性も報告されている。これら子宮内細菌叢については未だ属レベルでの検討が主であるが、一方で腔細菌叢における Lactobacillus と妊娠転帰の検討については、種レベルでされている報告が多くある。今回、子宮内細菌叢における Lactobacillus と IVF 転帰についての検討を種レベルで行ったので報告する。

【対象と結果】

対象は 2020 年 7 月から 2021 年 5 月に IVF 反復不成功で子宮内細菌叢の検査を行った 137 名(37.7±4.7 歳)である。検査の結果、最も多く検出されたのは Lactobacillus (65.6%)であり、その内訳は L. Iners(28.6%)、L. Crisupatus(19.0%)、L. gasseri(11.3%)、L. jensenii(4.9%)であった。Lactobacillus の占有率が 80%以上を LD、80%未満を NLD と定義したところ、LD:87 名、NLD:50 名であり、両群間で患者背景(年齢、BMI、内膜症既往)、IVF 治療歴に有意差は見られなかった。

【考察】

LD 症例において、子宮内細菌叢検査後、2 か月以内に胚移植を行った症例についての妊娠成績を比較すると、L. Iners の症例がその他の症例に比べて有意に妊娠率、着床率が低いことがわかった。

【結論】

今回症例数が少ないが、Lactobacillus の中でも種の違いによって妊娠への影響が異なる可能性が示唆された。今後症例を増やしての検討が必要である。